

# へ句案考

復本 一 郎

一 「句案に渡らば、第二等にくだらん」の意味

私が『去来抄』を読んでいて、いつも気になる箇所がある。『去来抄』に親しんで、すでに三十数年になるが、その箇所は、いつも曖昧なままで読み過ぎしてきた。小稿は、その箇所に、私なりの読みを定めてみようとの試みである。その箇所は、『去来抄』中の「へ先師評」のセクションにあるので、大東急文庫蔵の去来自筆草稿本に校訂を施して、左に掲げてみる。

辛崎の松は花より朧にて 芭蕉

伏見の作者、にて留の難有。其角曰「にては哉にかよふ。この故、哉どめのほ句に、にて留の第三を嫌ふ。哉といへば句切、迫なれば、にてとは侍也」。呂丸曰「にて留の事は、已に其角が解有。又、此は第三の句也。いかでほ句とはなし玉ふや」。去来曰「是は即興感偶にて、ほ句たる事うたがひなし。第三は、句案に渡る。もし句案に渡らば、第二等にくだらん」。先師重て曰「角・来が弁、皆理屈なり。

我はたゞ、花より松の朧にて、おもしろかりしのみ」ト也。(傍点、筆者)

傍点部を付した箇所の意味するところが、私には、判然としないのである。具体的に言えば、この言葉が指すところの対象は、何かということである。呂丸の発言を受けるかたちで「辛崎の」の芭蕉句（この句を第三の句と定めると仮定して——ということである）を指しているのか、あるいは、抽象的に発句一般を指しているのか、ということである。

右のエピソードそのものは、発句が発句たり得る一つの素因としての「即興感偶」性を指摘したものであり、芭蕉句「へ辛崎の」が、「即興感偶」の句であるとの去来の見解を示したものである。去来の見解は、芭蕉自身の「我はたゞ、花より松の朧にて、おもしろかりしのみ」との言によって、首肯されている。ちなみに、一句の意味としては、古注の中、明和元年（一七六四）刊、正月堂（梅門）著『師走囊』の「此句、辛崎の松はよのつね

はさも有まじきが、花の頃よりも臚に成とし也。花よりは、花の頃より也」がよいように思われる。なぜならば、同じ『去来抄』の〈修行〉のセクション中に去来の「位」に關しての言「句中に理屈をいひ、或物をたくらべ、或あたり合うたるほ句は、大かたくらめ下れる物也」が見えるからである。「花と松とに褒貶の心あれば」（『芭蕉翁発句評林』と解しては、「物をたくらべ」た「くらめ下れる」範疇の作品となってしまうのである。

しかして、去来の論旨そのものは、間然するところがないのであるが、「もし句案に渡らば、第二等にくだらん」の部分については、未解決のまま打ち過ぎてきた。その一つの要因に、この部分に含まれている〈句案〉なる俳論用語、私自身、明瞭に把握できていないことがあるろうかと思われる。問題としている部分のすぐ前にも「第三は、句案に渡る」と、〈句案〉なる俳論用語を含んだ一文が見える。

〈句案〉とは一体何なのか。どのような意味内容を包摂した言葉なのか。その辺を明らかにすることが、『去来抄』の問題の箇所を解決することに繋がるであろうことは、十分に予測し得る。従来、〈句案〉について本格的に検討を加えた論考は、皆無である。

管見の範囲では、〈句案〉なる俳論用語が散見されるのは、去来の俳論に限られている。去来独自の俳論用語

と言つてもよいようである（この点については、後述する）。となると、なおさら、〈句案〉の意味内容の把握が、『去来抄』の問題の一節の解決に大きくかわってくるということになる。そこで、去来の用いる〈句案〉なる語を丹念に検討していく必要があるのであるが、その前に、諸先学が問題の箇所を、どのように口語訳しているのかを見ておくことにしたい。〈句案〉なる俳論用語が見えるということで、範囲を少し広げて「第三は、句案に渡る。もし句案に渡らば、第二等にくだらん」の部分についての諸口語訳に目を通してみることにする（「第三」については、後に触れる）。

宇田久著『去来抄新講』（昭和十年三月、俳書堂刊）は、連句の第三ならば、もつと作意が残つてゐる筈です。単に「にて留め」だからと云うて、連句の第三と定めることは出来ませう。もし内容から見て、それらしい作意が窺はれる時に、始めて連句の第三とすべきでございます。

と口語訳し、〈句案〉については、「句を考へること。句案にわたるとは、即吟ではなくて、いろ／＼と作意を加へたことをいふ」と注している。

木島俊太郎著『評註去来抄』（昭和十八年十二月、大観堂出版刊）は、口語訳は施されていない。〈句案〉については「句を案出すること」と注している。

四方山径著『随筆去来抄』（昭和二十三年三月、文潮社刊）は、

連句の第三といふ事になると、もっと作意が残って居る筈ぢや。単ににてで留めてあるから、といふことのみで、連句の第三と即断は出来かねますなウ。若しそれらしい作意のあることが見られたなれば、その時始めて連句の第三とすべきでござろう。しかし発句が句案に渡つては、句の価値はうんと下り申さう。

と口語訳している。

岡本明著『去来抄評釈』（昭和二十四年二月、三省堂刊）は、

第三は考へた上で作るものである。句案の上に成つたものであるならば、句は二流以下に下るであらう。と口語訳している。

岩田九郎著『去来抄評解』（昭和二十六年十二月、有精堂刊）は、

第三の句は（実感でなく）頭で考えた句である。もし頭で想像の上でできた句ならば、（句の価値は）第二等に下るであらう。

と口語訳している。

宮本三郎校注『校本芭蕉全集俳論篇』（昭和四十一年七月、角川書店刊）は、「第三は句案に渡る」に注して

「連句の第三の句は、発句・脇句の世界を一転するため、考えて句をこしらえるものであるの意」と述べている。

栗山理一校註『連歌論集 能楽論集 俳論集』（昭和四十八年七月、小学館刊）は、

第三は考えてこしらえるものである。もしこの句が考えて作ったものであれば、句の価値は第二等にさがるであらう。

と口語訳し、〈句案〉については「第三は、発句・脇を受けてこれを転ずる場であるから、考えて句作りをする」と注している。

南信一著『総釈去来の俳論（下）去来抄』（昭和五十年五月、風間書房刊）は、

第三は即興ではなく、前句との関連を考えて作るものです。もしこの句が即興でなく考えて作った句であるならば、平凡な句におちてしまふでしょう。

と口語訳している。

以上、少々迂遠の感がなくもなかったが、問題点の所在を明らかにするために、該当箇所の先行する口語訳を六種（二種は、参考のために〈句案〉の注のみ）紹介してみた。

そこで、私の未解決部分「もし句案に渡らば、第二等にくだらん」に焦点を絞って、この言の対象が何を指しているかを、諸説の中に探り、整理してみることにしたい。

まず、宇田久氏の説であるが、この説は、すこぶるユニークである。「もく句案に渡らば、第二等にくだらん」の対象を、発句とも第三とも限定しない。「第二等」を第三と同義語と解するのである。その結果、対象が「句案に渡」るならば、それは紛れもなく第三の作品だといふのである。去來の言「第三は、句案に渡る」から帰納してのものであることは明らかである。とすると、へ句案は、第三のみについて言われることであり、発句について言われることはないのか、という問題点が、ここに浮上してくる。

四方山徑氏の説は、措辞からして、宇田説を参照しているようであるが、立場は、まったく異っている。四方氏は、該当部分の対象を、発句一般に限定する。へ句案を発句についても認めようとの立場である。ただしへ句案の発句は、「第二等」だといふのである。

岡本明氏の口語訳は単なる逐語訳であり、問題点を回避しているようである。氏の立場はまったく見えてこない。どう好意的に読んでも、該当箇所が何を指しているかが明らかとならないのである。口語訳という作業も、本文的確な理解なしには為し得ないという好例となつてしまっている。

岩田九郎氏の口語訳も、語を補って、一見丁寧であるかの印象を読者に与えるが、岡本説と同様、当該箇所の

対象は、まったく見えてこない。これまた、問題点を回避しての口語訳例である。

栗山理一氏の口語訳は、さすがである。氏の立場が明瞭に見てとれる。氏は、当該箇所の対象を、芭蕉句へ辛崎のへを脱みつつも、発句一般として理解している。芭蕉句の場合は違うが、へ句案をもつて作った発句であるとしたならば、その価値は、「第二等」だといふのである。四方山徑説と同じ立場に立つものである。

南信一氏の口語訳も明確。栗山理一氏と同じ立場に立つ。発句におけるへ句案を念頭に、その位置付けを明らかにしている。

以上、六種の口語訳中、二種（岡本説、岩田説）の口語訳は、私の問題としている箇所について、その答を示してくれるものではなかった。宇田説は、へ句案を第三に限定して見ようとする口語訳であった。対するのが、四方説・栗山説・南説で、この場合のへ句案は、発句にかかわつての発言と理解しての言であった。それでは、私は、宇田説に加担するのか、四方・栗山・南説に加担するのか、または、両者とは別種の口語訳を提示し得るのか、さらに作業を進めてみることにしたい。

\*

私は、『去來抄』の問題の箇所を、小稿冒頭において、去來自筆の草稿本によって掲げた。この草稿本は、推敲

の跡が著しい。問題の箇所も、当初は、

第三は、句案に渡る。もし句案に渡らば、此句、又はるか下品ならん。

と記されていたのである。それが「此句、又はるか下品ならん」の箇所が朱抹されて（尾形幼解説・釈文『去来抄覆製』昭和三十三年六月、大東急記念文庫刊、参照）、第三は、句案に渡る。もし句案に渡らば、第二等にくだらん。

と訂正されたのである。栗山理一氏、南信一氏の口語訳は、訂正前の表記が参照されているのであろう。訂正前の表記では、確かに、栗山・南両氏の口語訳のごとき理解となるであろう。が、去来にとって「此句、又はるか下品ならん」の表記では、去来の意図するところを十全には伝え得ていないとの判断が働いたのであろう。それだからこそ、抹消したのである。それでは、「もし句案に渡らば、第二等にくだらん」の表記に意図したものは、何だったのか。それをこれから追いかけてみようというわけである。

もう一つ、去来没後の安永四年（一七七五）に晧台によって刊行されている板本『去来抄』では、同箇所が、第三は、句案に渡る。もし句案にわたらば、第三等にくだらん。

となっている。従来、この本文、自筆本の「第二等」を

「第三等」に改竄（意味のない訂正）したに過ぎないものと理解されてきた。が、私は、板本『去来抄』は、去来浄書本を底本にして、適宜、晧台が校訂を加えたものであると推論する立場に立つものであり（拙著『本質論としての近世俳論の研究』昭和六十二年四月、風間書房刊をはじめ、折にふれて述べている）、言われるごとき粗本ではないと確信している。とすると、「第二等」より「第三等」への一見、意味のない改訂は、何なのか。底本は、「第二等」になっていたとして、校訂者の晧台は、なぜわざわざ「第三等」などやったのか。——この改訂箇所、「第二等」に対する「第三等」ではあるまい。「第三等」であろう。すなわち、晧台は、「第三は、句案に渡る」の文脈からの流れを重視したのである。それゆえ、〈句案〉をもって作句したならば、第三などの位になってしまふ、との意味内容と判断したのである。晧台の時代が、発句に対する関心、大いに沸き上った時代であることも影響しているかもしれない。この晧台の立場の流れに立って口語訳したが、先の宇田久氏である。

① 第三は、句案に渡る。もし句案に渡らば、第二等にくだらん。

② 第三は、句案に渡る。もし句案にわたらば、第三等にくだらん。

となっている。従来、この本文、自筆本の「第二等」を

③ 第三は、句案に渡る。もし句案にわたらば、第三等にくだらん。

との三つの本文が伝わるのであるが、今日の『去来抄』の諸本の信憑性からいって、第一番目の本文の意味内容（一番難解であるが）を解決する方法で小稿を進めるのがよいであろう。

なお、検討を加えた四種類の口語訳中、宇田久氏は③の本文に従い「第三等」と訓んでいる。四方山径・栗山理一・南信一の三氏は、①の本文に従っている。

\*

〈句案〉の意味内容を検討するに先だって、「第三は、句案に渡る」の「第三」について確認しておくことにする。去来自身において「第三」の句格を定義しているのは、この箇所のみであり、他には見えない。「第三」は、言うまでもなく、俳諧の連歌（連句）における発句、脇に続く第三番目の作品。五・七・五の長句であり、季語のある場合が多いので、発句と見紛う可能性があるが、切字はなく、留めは「に・て・にて・もなし・らん」等である。それゆえ、今、検討を加えている問題の箇所を含むエピソードのような状況——芭蕉句（辛崎の）は、切字が使われておらずに、「にて」で留まっているので、これは「第三」の句である、いや、「即興感偶」の作品であるので発句である、といったような——を惹起する

のである。もっとも、試みに、芭蕉参加の連句作品に目を通していても、「にて」留めの「第三」は、意外に少ないのである。

○ 蝶蜂を愛する程の情にて 良品

○ 月にまつ狸の糞をしるしにて 翁

○ 春も雪茶通の手前ゆたかにて 岩翁

○ 草むしろ煙草を廻す斗にて 巴丈

など、貴重なサンプルである。〈草むしろ〉の句を除いて、いずれも有季の「第三」である。

「第三」については、連歌論書にも種々記載が見られるが、初期の俳論書において「第三」を定義しているものとして、寛永十九年（一六四二）刊、腐俳子（安原貞室）著『俳諧百韵之抄』中の左の記述が、連歌論における「第三」にも目配りが為されており、注目される。

第三よりは、かけ離れて、長高く、幽玄にすべきよし連歌のならひとかや。されど是（筆者注・俳諧）は、狂言なれば、強てそれにもかゝはらず、唯一句の仕立おかしやかなるを宗とす。錦の袋にぬかみそをつゝみ、花のえだに餅をさしはさめらんやうにせよとの先賢のをしへにまかせ侍るなり。

俳諧において連歌の諸規則の無視、破壊が為されたことが見てとれ、興味深い。当初、俳人達が一番意を配ったのが、やはり「おかしやか」（滑稽）ということであつ

たのである。

蕉門の俳論書になると、やや様相を異にし、連歌への回帰が志向されたようである。土芳の『三冊子』へ白雙紙（元禄十五年成立）には、芭蕉の言葉「大付にても、転じて長高くすべし」が紹介されている。ここでは、去来の「第三は、句案に渡る」とのかかわりにおいて許六の、元禄十五年（一七〇二）刊『宇陀法師』を見ておくことにする。

第三の句、第一難義の場所也。上手の入ると云は第三也。発句の打越、脇の句にはなれて付を上手の手際とは云也。しかも第三のふりを持って、留りに去嫌ひあれば、第一の難所也。一卷の出来、不出来、脇、第三より極る也。

この許六の「第三」論を集約すると、去来の「第三は、句案に渡る」ということになるのであろう。なお、「第三のふり」に関しては、浪化の伝書『俳諧秘文抄』（成立未詳）に「第三は、転句也。前二句の内外動静を見定めて変化すべし。第三振といふは、発句にも非ず、平句にも非ず、能その風姿を弁へ知べし。留りの事、何れも上へ廻る様に転動せざれば留らぬと知べし。されば、て・にて・らむ・もなし・に、など古来より定りたる手尠於葉にて、みな心のいひ残るを用る也。第三は、都て上の五文字に一句の全体を断るべし。此故に、上の五文字重

き字を用るの教有り」とあるのが参考になる。

## 二 「句案」の意味内容

そこで、いよいよ「句案」の意味内容の検討である。「去来抄」へ「修行」の次の一節が「句案」を真正面から論じていて詳しい。

去来曰「句案に二品あり。趣向より入と、詞・道具より入ると也。詞・道具より入る人は、頓句・多句也。趣向より入る人は、遅吟・寡句也。されど、案方の位を論ずる時は、趣向より入るを上品とす。詞・道具より入る事は、和歌流には嫌ふと見へたり。はいかいは穴勝に嫌ず」。

内容は、平易である。これによると、「句案」とは、作句発想の動機を形象化する方法ということになる。念のため、古注積書、文化三年（一八〇六）成立の田辺文里著『去来抄解』を引いておく。

按、趣向ヨリ入トハ、其事・其物ノ姿ト情ト其場ノ本元ヨリ内へ案ジ入ル事ナリ。又、詞ヤ道具ヨリ入ル時ハ外ヨリ句作シテ内へ入ル故ニ、皮ノミニテ、肉骨無物ナリ。姿ト情ノ内ヨリ案ジ出ス時ハ、詞ハタノミ作ラザル故ニ、自骨ヨリ作り出セバ、其基、先ニ立ナリ。二ツ共ニ其人々ノ得道有。必竟、外ヨリ内へ尋入ルト、内ヨリ外へアフレ出トノ差別也。

但シ、外ヨリ内へ入ハ、今日ノ修行ナリ。内ヨリ外へ出ハ、平日ノ修行ノ徳ニ依テ、物ニ感ジテアフレ出所也。又、云、詞、先浮ミテ、心未至ラザル時ハ、不出来也。其時ハ、其詞ノ縁有事、縁有物ヲ求テ、取合、掛合テ作ルベシ。始ニ道具ヲ得タル時モ、左ノ如シ。右、内外ノ二ツ有故ニ、心、先浮ミ得タル娯情ノ趣向有バ、詞ヲ捨テ、其得タル事物ノ場ト、娯情ノ本意ヲ探リ求テ、吐出ベシ。

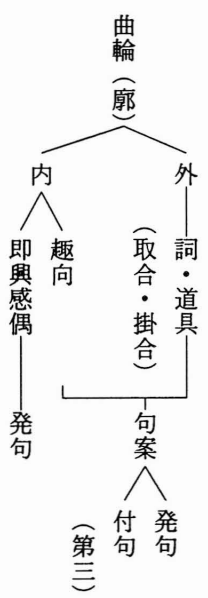
『去来抄』の言わんとするところを的確に敷衍し得ており、私に加えるべきことは、この範囲では、ない。この〈句案〉と対蹠的位置にあるのが「即興感偶」である、とするのが去来の考え方である。そこで、これも『去来抄』〈修行〉中の次の一節に注目してみよう。

許六曰く「ホ句は、題の曲輪を飛出て作すべし。廓の内にはなき物なり。自然の内には有は、天然にして希也。去来曰く「ほ句は曲輪の内になきものにあらず。殊に即興感偶する物は、多く内成。然れども常に案ずるに内はすくなし。多くは古人の糟粕也。千里にかけ出て吟する時は、句多きのみにあらず、第一、等類をのがれる。(中略)功なるに及んでは、又、内外の論にあらず」。

許六と去来の発句論であるが、両者の見解にさほど懸隔があるわけではない。先の『去来抄』の〈句案〉論と、

右の一節を、『去来抄解』を参考にしつつ重ねるならば、許六言うところの「題の曲輪を飛出て作す」こと、あるいは去来言うところの「千里にかけ出て吟する」こと、と「詞・道具より入る」句作りとは、同一内様を指すと見てよいであろう。『去来抄解』で文里が明かしているように「取合」に「掛合」による句作りであり、〈句案〉に包摂される。対して、許六言うところの「廓の内」「自然の内」にある句作りの一つに去来言うところの「即興感偶」が指摘し得るのである。それでは、「即興感偶」と「趣向より入る」句作りとは一致するものであるかという点、そうではない。「趣向より入る」句作りは、〈句案〉の一つであり、私が小稿で問題としている箇所が含まれている『去来抄』〈先師評〉の一節に見えるように「即興感偶」と〈句案〉の両句作りは、相容れないものだからである。

以上を、これから述べることをやや先取りしたかたちで加えて図示すると、左のごとくなる。





私が、やや先取りしたかたちで、と言ったのは、へ句案が、「発句」と「付句」(第三)の二つながらにかかわることを図示しているところについてである。『去来抄』へ先師評の「第三は、句案に渡る。もし句案に渡らば、第二等にくだらん」の箇所のみに限ってみるならば、へ句案は、「第三」における作句方法と解しても不思議はないし、先に見た『去来抄』へ修行のへ句案論では、へ句案が「発句」の作句方法であるのか、「第三」の作句方法であるのか、それとも、両者にかかわるのかは、何ら明示されていなかったのである。

そこで、へ句案が、「発句」「付句」の二つながらにかかわる作句方法であることを、実例によって明らかにしておく。

まず、「付句」に関しては、問題の箇所「第三は、句案に渡る。もし句案に渡らば、第二等にくだらん」によって明らかであろう。ただ、この箇所のみでは、へ句案が「第三」に限定してのもののような印象を受けてしまうが、「付句」一般について言われたようである。元禄七年(一六九四)五月十三日付浪化宛去来書簡に次の一節が見える。

せい高かれと見かつ祇園会  
此御句、勝申候。同じくは、

せいの高さに見かつ祇園会

仕度候。あまり断り過候も、却而いやしく候はんか。  
此意味も御句案可被遊候。

ここでは、へ句案が、「第三」のみならず、「付句」一般についても言われたものであることを確認しておけばよいであろう。

問題は、むしろ「発句」についてのへ句案である。「第三は、句案に渡る。もし句案に渡らば、第二等にくだらん」から、へ句案と「発句」のかかわりを抉り出すことは、不可能に近いであろう。へ句案が「発句」にかかわる作句方法であったことを明らかにしている三つの例を示してみる。

最初の例は、これも先の浪化宛去来書簡に見える次の一節である。

猪のねに行かたや明の月

此けしきの面白さに、自讃にて翁へみせ申候処に、翁暫く物ヲモ申されず候ゆへ、拙者心に、翁の猪の山へかへる気色しられざるやと、重而其風情咄し候へば、翁申候は「さればそのけしきの面白(き)事は、古人も「かへるとて野べより山へいる鹿のあと吹おくる萩の上風」とよみ申候へば、暫く俳諧の手柄なきやうに存じ候故、及句案候」とこたへ申され候。(下略)

結果として、去来の一語が、『新古今集』の源通光の

へあけぬとて野べより山に入る鹿のあと吹きおくる萩の下風」と発想契機を一にするのであるから、そのような場合には先行する「古歌」（和歌）を「一段せめ上」て「俳諧の手柄」を示さなければならぬ——という主旨の一節中の一部である。

しかし、去来自身が「けしきの面白さ」によって作った作品であると吐露しているように、そもそもは「即興感偶」の一句であつたのであろう。が、先に見た『去来抄』へ修行」に「殊に即興感偶する物は、多く内（筆者注・「曲輪」の）成。然れども常に案ずるに内はずくない。多くは古人の糟粕也」とあつたごとく、「即興感偶」の作品が、必ずしも秀作とは限らないのである。「即興感偶」が「発句」の一つの素因であり、「即興感偶」によつて「発句」たり得ることは間違いないのであるが、それがストレートに秀作ということにならないのである。「多くは古人の糟粕」というのが実情であつたであろう。そこで登場するのが「句案」である。私は、先に、「句案」を「作句発想の動機を形象化する方法」と定義したが、それは、当然オリジナリティー（蕉門の俳論用語で言へば「新しみ」）を生み出すための「方法」でなければならぬのである。芭蕉は、去来の「猪の」の一句を「句案」することによつて、斧正を加え、オリジナリティーのある（和歌とは異なる俳諧性のある）作品にしよう

試みた、というのが右のエピソードである。このように、「句案」は、「発句」に關しても言われたものなのである。ここで注目しておきたいことがある。小稿の冒頭部分で、私は、「句案」が、去来独自の俳論用語であることを指摘した。そのことに間違ひはないのであるが、右の浪化宛去来書簡において、「句案」は、芭蕉の言葉を祖述した箇所に見えるのである。この記述が信憑性のあるものだとすると、俳論用語「句案」の源は、芭蕉にあることになるのである。しかも、作句方法として確たる位置を占めていたのである。

もう一つの用例を見ておくことにする。これも浪化宛去来書簡である。今度は、去来自らが用いた「句案」である。

鐘隔二寒雲一声到遠

此心におもひよせて、

花の雲鐘は上野かあさくさか 翁

深山木のその梢とは見えざりし桜は花にあらはれにけり

切かぶの芽立を見れば桜哉 尾張

梅ヶ香を桜の花にやどらせて柳の枝に咲てぞ見ん

梅折て柳の枝にまたがせん 其角

雲花にまがふ事を

峯の花少は雲もまじるべし 野水

「またがせん」と謂、「まじるべし」と謂、「切かぶ」  
「上野かあさくさか」など、皆己が力を古詩・古歌  
の上にせめ上て用ヒ申候。さなく候へば、たゞ詩を、  
歌を、発句に直したるまでに候。此境、尤御句あむ  
可レ然候。

前の、芭蕉の言として見えたへ句案もそうであった  
が、この例でもへ句案（へ句あむ）が古詩・古歌を  
「せめ上」る作句方法として語られている。このことに  
は留意せねばなるまい。古詩・古歌を踏まえての発句は、  
「即興感偶」の発句とは対照的な位置にあるのである。  
第三番目の用例である。これは元禄八年（一六九五）  
正月廿九日付の許六宛去来書簡の中に見える。

御命講やあたまの青き新比丘尼

（中略）中の七字にてたゞ新比丘尼の頭の景色ば  
かりに謂捨候はんよりは、今少句案も候はゞ、一等  
秀たる御句にも成り候はんかと存じたるにて候。尤、  
此比丘尼、新老比丘尼にて且而おもしろからず候。  
若き新比丘尼ならでは、一句立ちまじく候。其処は又、  
申様もあるべきか。併、下拙が申分は、一句の惣意  
にかくりたる句意に候。但、頭の青き新比丘尼とい  
へる物の、発句になるべしと、一物の上にかくりて  
御句案に候や。さ候へば、各別の争論に候。

許六の一句へ御命講やへについての去来の論評である。

「御命講」は、法華宗の寺で宗祖日蓮上人の忌日（十月  
十三日）に営む法会。ここに見える二つのへ句案の包  
摂する意味内容は、はからずも『去来抄』へ修行の  
「二品」のへ句案論を具体的に示している。作句方法  
には「取合」（「掛合」と「一物」がある。許六が積極  
的に喧伝したのは「取合」であり、去来が擁護したのは  
「一物」であるが、右のエピソードにおいては逆の立場  
に立っているように思われる。去来は「新比丘尼」の句を、  
単に「新比丘尼」を形容するだけの「あたまの青き」と  
句作りしてしまうのはもったいないとの立場であり、許  
六の立場（去来の推測する許六の立場であるが）は、  
「新比丘尼」の「一物」によって作句しようということ  
である、というのである。ということとは、これまでに見  
らかにしてきたように、去来においては、「詞・道具よ  
り入る」へ句案が念頭にあったということであり、許  
六にあっては、「趣向より入る」へ句案が胸中にあっ  
たと推断されているのである。「取合」は「曲輪」の外  
におけるへ句案による作句方法であり、「一物」は  
「曲輪」の内におけるへ句案の作句方法であるからで  
ある。——ということ、へ句案が、必ずしも古詩・  
古歌を「一段せめ上」る（「せめ上」る）場合に限って  
の作句方法でないことがここに、確認し得たのである。

そして、この用例の〈へ句案〉も、また、発句における「作句発想の動機の形象化の方法」として、十分に市民権を獲得し得ているのである。

### 三 問題の箇所への私見

以上、検討を加えてきたことを踏まえて、『去来抄』〈へ先師評〉の問題の箇所、

第三は、句案に渡る。もし句案に渡らば、第二等にくだらん。

を口語訳してみることにしたい。その前に、いくつかの事項を確認しておく。すでに見たように、〈へ句案〉は「第三」のみならず、「発句」に關しても言われたところの作句方法であった。ただ、『宇陀法師』『俳諧秘文抄』を参照して明らかのように、「第三」においては、〈へ句案〉を必要条件としているのである。一方、このことと表裏を為すのであるが、去来の言「是は即興感偶にて、ほ句たる事うたがひなし」は、必ずしも、「発句」にとつて「即興感偶」が必要条件であることを指したものであるのではないのである。「即興感偶」の句は紛れもなく「発句」であるが、〈へ句案〉の句も、「即興感偶」の「発句」に遜色ない「発句」であることなのである。ということ、問題の箇所を口語訳してみることにする。

「第三」は、必ず〈へ句案〉によって作らなければならぬ。もし、芭蕉の句〈へ辛崎の〉が、呂丸が言うように「第三」の句であるとするならば、〈へ句案〉という点からいって、〈へ辛崎の〉の句は、第二級の「第三」ということになってしまふだろう。

と、まあ、こんな具合になるであろうか。先行する諸先学の四種の口語訳（実際には、二種に大別できた）とは別種の口語訳ということになった。

注 〈へ手柄〉については、私は一般用語ではなく、俳論用語と考える。神奈川大学経営学部「国際経営論集」第十号（平成八年三月）所収の拙稿〈俳論用語としての「手柄」の提唱〉を参照されたい。

（平成七年九月二十四日 了）